読者エッセー

海を越えた歌声、中野一郎のこと

古畑 博子（68歳・松本市波田）

1944（昭和19）年12月9日、フィリピンのレイテ島沖で戦死した一人の兵隊がいた。

松本市波田生まれのテノール歌手、中野一郎である。当時の波多村長、中野拓雄の長男として生まれ、生来の美声で東京音楽学校、現在の武蔵野音楽大学に進み、42（昭和17）年に学生結婚。翌43年、日本音楽コンクール声楽部門3位と、才能を開花させた。故郷、波多村小学校での凱旋（がいせん）コンサートでは、「オー・ソレ・ミオ」「かやの木山」を披露したという。

しかし、12月には学徒出陣。その時、4カ月になるわが子を抱く、同じ音楽の道を歩む妻の姿があった。それから1年後の12月5日、レイテ島増援作戦でのオルモック輸送作戦に参加し、12月9日、帰らぬ人となってしまった。三十数万にのぼるフィリピンでの戦死者の中に、歌に生きた一人の青年がいたことを、私は記したかった。

43年の同コンクールで、バイオリン部門にはバイオリニストで前才能教育研究会会長の豊田耕児、作曲家で音楽教科書を編さんした石桁真礼生、うたごえ運動の創始者・関忠亮など、戦後日本の音楽界の担い手たちがいた。中野一郎がもし生きていたら、楽都松本出身の往年のテノール歌手と言われていたかもしれない。

フィリピン、セブ島最南端リロアンの教会前広場で、海に向いて「帰れ　ソレントへ」「オー・ソレ・ミオ」「サンタルチア」などイタリア民謡を朗々と歌って、部隊みなを沸かせたという。間もなく、70人の所属艇隊のうち49人が中野一郎と共にオルモックの海で戦死。今はダイビングの若者たちでにぎわう観光地である。終戦8カ月前のことであった。

戦争は、かけがえのない命をどれだけ奪っていくことだろう。そして今も。平和を！平和を！

信濃毎日新聞 松本平タウン情報 2016年12月8日(木)